

## A I と国会審議

決算委員会 専門員

あきや くんじ  
秋谷 薫司

最近、様々な領域で人工知能（A I）の活用が議論されている。経済産業省では、国会答弁案作成業務にA Iを活用しようと実証実験を行った。生産性向上など働き方改革が言われる中で、国会答弁の準備対応が長時間労働の要因とされる現状から、答弁案の作成業務を効率化して負担の軽減が図れないかと、業務の効率化と質向上を目指した実験である。視察させていただいたところ、システムは国立国会図書館の会議録データベースを活用し、民間のコールセンター用A Iに学習させて、文章検索させる手法であった。過去の類似質問を検索・表示、下書き作成という答弁案作成事務の一部分の効率化を求めたシステムの試作であるが、現段階では、過去の審議から近似例を検索する確度を上げたものとの印象であり、質問を入力すれば答弁案がたちまち出来上がるという代物ではない。だが、専門用語の辞書機能導入や過去の答弁案を蓄積・学習するなどの改良を加えることにより答弁案作成事務の一部効率化に資する可能性があるとの評価をしている。

片や、質疑にA Iを活用するのはどうであろうか。この水準のA Iの得意とするところは過去の蓄積を活用することであって、新たな事実の指摘や提言の提示等の想像力を発揮することまでは期待できない。また、質疑者の個々の問題意識、心理、駆け引きや戦術なども含め人間的な個性による部分もあり、この水準のA Iによる過去の焼き直しの質疑案作成ではあまり役に立たないであろう。ただし、質疑したい案件から過去の質疑項目を引き出し、質疑の要点やたたき台を瞬時に表示して質疑案作成事務を一部効率化することや、質疑に対する答弁を確認して、答弁を前提とする質疑の準備で更に議論を深めるのに貢献することが期待できると思われる。今後更に各政党の公約や政策方針、質疑者の思想に沿う個別の学習等の改良を加えることにより有用な道具となる可能性もある。

ディープ・ラーニングによってA Iが更に発達すると、A Iによって世の中のあらゆる情報を分析し、最適な政策の提示が行われ、政治家がそれを活用することが考えられる。韓国では、政治が人間の情緒に左右され歪められるとの指摘のある現状に、情緒に左右されることなく最適な政策の選択を行うために、A Iが政治を行った方が良いとの「A I政治家論」もある。A Iが人間に代わり政治を行うという極論にはならないであろうが、人間とA Iの関係の在り方を整理するという課題も見えてくる。

これまでワープロやパソコン、インターネットやメール等のI Tの進歩が業務の効率化に貢献したことは論を待たず、同様にA Iも日常的な業務遂行の道具になることは想像に難しくなく、その活用により国会審議に深みと緻密さをもたらし、審議の質向上に貢献することになるであろう。国会審議を補佐する事務局の日常業務の効率化にも大いに活用できるであろうし、その役割としてもA I時代に備えた準備をする必要があると考える。